

彙報

●京都帝國大學文學部史學科
大正十年度講義題目

西藏の風俗宗教等を見るに便なり "Southern Tibet" (Sven Hedin) は一九〇六年に於ける氏の第三回の探検報告にてトランスヒマラヤ大山系、インダス、サトレデ、ブラーマプトラ三大河源發見の次第を詳述し "The Story of Shackleton's Last Expedition" (Shackleton) は一九一五年氏の南極大陸横斷探検の記載なり。〔下田〕

史學研究法 二坂口教授

國史概説(中世及近世)

中世の都市 三浦教授

近世社會政策(演習)

古文書學總論及實習

國史概説(古代)

國史地理 喜田教授

史籍講讀並解題

東洋史概説(中世)

支那人の風俗に關する研究

東洋史概説(古代)

支那史學史

東洋史概説(近世)

近世の外國關係

東洋史演習

二坂口教授
三浦教授
喜田教授
桑原教授
内藤教授
矢野教授

基督教會と歐洲中世の政治及文化 二 植村 講師

●京都帝國大學文學部卒業論文

京都帝國大學文學部本年度卒業生の提出せる論文中、
史學に關係ある題目並に提出者左の如し

史學科

○選科生
△委託生

國史專攻

我國に於ける淨土信仰の起原發達 △源 豊宗

支那史專攻

五嶽祭祀考 神田喜一郎

高麗の大覺國師に關する研究 内藤 雋輔

哲學科

哲學專攻

プラト―後期における論理に就て 加川航三郎

「プロチヌス」の哲學に於て 橋寺 太郎

リッケルトの認識論に於ける實在と價值

觀山 雲洲

カント認識論に於ける對象性の問題 伊東 法俊

印度哲學史專攻

最近世史
世界大戰史
西洋史演習

原 教授

西洋史概説(十字軍以後)
ペリクレス時代
西洋史演習

坂口 教授

地理學通論
地理學史
ユーラシア

小川 教授

地理學實習
演習

人文地理學

人口論

演習

石橋 教授

考古學通論

支那考古學

希臘羅馬考古學

朝鮮古史

朝鮮文藝史

朝鮮史演習

今西 助教授

阿毘達磨俱舍論にあらはれたる七十五

法論と因果論とに就きて

二之宮善堯

美學美術史專攻

プロウチノスが審美觀

○山内 朝資

社會學專攻

魯西亞虛無主義の社會學的研究

金杉 恒彌

文學科

國文學專攻

長歌詞珠衣と長歌私篇とに就て

河村 實

源俊賴の歌學

岡田 希雄

萬葉集の倫理

濱本勝治郎

古淨瑠璃の研究

穎原 退藏

『岩崎本日本書紀』訓點研究

○小中 正晴

平家物語につきて

△高橋 廣藏

獨文學專攻

Goethes Faust, unter dem indischen Einflusse.

長谷部武次郎

英文學專攻

Robert Browning; Pippa Passes.

○横澤 信雄

John Keats.

○金剛 宗雄

A Study of Tennyson's In Memoriam ○木畑浩四郎

梵語學梵文學專攻

アヴァダーナ概論及其一部翻譯 ○高島 寛我

●史學研究會

例會 二月十二日午後一時半より文學部第六教室にて開

催左の講演あり

親鸞繪傳の筆者淨賀と其の門流に就いて

會員 文學士 澤村專太郎君

鎌倉中葉以後流行製作せられし高僧行狀傳繪が畫と詞と並存する傳繪、畫のみの繪傳等の別あるも今は姑く繪傳の語を用ふるこゝより説起して淨賀の筆と傳へらる、此親鸞繪傳に確實なる證左あるものなきこゝ彼が信州塩崎の康樂寺第二世の住職たりしこゝは確實にして第三世淨耀宗舜第四世淨蓮圓舜の皆所謂康樂寺流の繪筆を弄せるこゝを論證し淨賀の眞蹟の以て徵すべきものなしと雖も兎に角此者等が鎌倉末より南北朝に互り一畫派を爲せるものなるを論ぜり

道鏡論

會員 文學博士 喜田 貞吉君

道鏡失脚に關する事件が實は表面的にも裏面的にも甚しく疑問を以て充たさるゝこゝを論じ對せらるべき筈の阿曾磨が却つて多嶽島守に榮轉し更に大隅守に任ぜらるゝに至りしは反對に賞せらるべき筈の清磨及び法均が漸く流謫地より召し返されたるのみにて前地位よりは低き身分に久しく放置せられたりし事又道鏡に法王位を授けて怪まず更に之を天子ミスすべしとの説の出づるに至れる事特に道鏡が唯一の保護者たる稱徳天皇崩御後までもなほ非望の念を捨てざりしのみならず何等自衛の策に出づる事なくして陵下に虚を結び群臣の迎えを僥倖せしが如きは到底從來普通の歴史の説く如き方法にては解すべからざる現象なる所以を述べて道鏡の皇胤なるべきこと又神教奏上の裏面に潜める事實等につき續日本紀日本後紀等の記事並びに當時の事情等より詳論を試みたり

來會者八十餘名午後五時講演終了席を本部樓上に移し茶話會を開き午後六時散會せり

● 讀 史 會

例會 昨年十二月七日午後六時より學生集會場に於て開

催出席者三浦教授魚澄中村富森下川桑原學士及び橋川源井川岩橋諸君にして左の講演あり十時散會せり
一我國に於ける「末法」の時期に就いて

源 豐 宗君

愚管抄の後三條天皇の條に「世の末の大なるかはり目」云へる文に據りて我國にては延久四年を以て末法に入れりする富森學士の説に對し扶桑略記、大鏡、愚管抄等に據りて神武元年が釋尊滅後二百九十年に相當し從て末法の第一年たる釋尊滅後二千一年は後冷泉天皇永承七年に相當する事を説きて春記、扶桑略記、僧綱補任抄出等の文を舉證し、次に其前後に於ける末法思想を述べて藤原時代の暗流に注意し最後に鎌倉時代に於て新宗教の勃興と共に道元の如き末法説打破の思想の起り來れる事に論及せり

一雨森芳洲の著書 文學士 桑 原 親 通君

先づ芳洲の生地が近江伊香郡雨森郷なる事より其生涯及び爲人を略述して元祿二年二十二歳にして對島宗氏に仕へ學事、譯官の事を掌り其間に於て著はす所の諸書に就いて其内容を明にする所あり多く藩の經濟教育等に就て

其經倫を記せるものなるが特に注目すべきは日鮮關係の史料にして信使停止覺書、信使一件、國書々改總論、交隣始末物語等是なり、又國王號一件に關して白石に與へし和文の書は芳洲の意見を明にするに共に兩者の親交を窺知せしむ云々

一三三三院の極樂聲歌に就いて 橋 川 正君

最近三浦教授と共に大原三三三院の記録文書を調査せられたし時に見られし長祿四年書寫の與書ある極樂聲歌に就いて先づ其書寫者良秀の聲明上の傳統を述べ良忍の七代、圓珠の五代、蓮入の弟子なる事を明にし、次に此聲歌が雅樂の節に合せて歌はれし事を述べて嘗て帝國文學に文治二年の與書を有する歌謠の斷片が梁塵秘抄の一片ならんとして紹介せられしが、それを以て此聲歌に比するに全く此聲歌の一部にして極樂聲歌の既に鎌倉初期以前より雅樂の節にて行はれし事を知り聲明及び音樂史上興味ある事實なる事を注意せられたり

一三三三院の記録文書 文學博士 三 浦 周 行君
三三三院來迎院の沿革より其記録文書の種類の多く殊に舊如來藏のものに尤物の存する事を説かれ就中記録には長

承二年の具註曆の裏に記されたる慈覺大師傳、同師の入唐求法巡禮記を參照すべき入唐往返傳記、長慶天皇の事の見ゆる王代一覽、鎌倉南北朝時代の門葉記の零本、文書には尊雲(護良)親王に對する梶井寺領の附屬狀其他法性寺文書、園城寺勸學院文書等注目すべく其他大原聲明業御修法等に關する史料多く存せりてそれらの中より特色あるものを指摘せられたり

例會 一月二十八日午後六時より學生集會場に於て開く

出席者三浦、喜田兩教授、富森、鈴木學士學生數名あり
左記の講演ありて十時散會せり

一 法然上人と兼實公 江 藤 澁 英君

兼實の信仰の開展として一般の密教的信仰より次第に法然に接近し行く過程を明にし兼實の信仰内容の必ずしも純一他方往生に非ずして現世祈禱の要求をも含める事を指摘する所ありたり

一 日本の數詞に就て 文學博士 喜 田 貞 吉君

嘗て白鳥博士によりて日本の數詞は五指を屈伸一回する事によりて十を得、一二三四五五六七八九十は發音上順次同一なる事を説かれたるに對し、日本の數詞は八を

以て數の多きを表せる所より見れば之れ八の極大數なりしが爲にして、拇指は元來物の數をよむ時に當りて之に與らず、他の四指によりて數へられ、四指の屈伸一回によりて八を得、一三五、二五六、三三七、四三八は夫々國語上普通にして、即一三三四を二回繰返す事によりて八を得、即ち八が極大數なる也きて種々の方面より論證せられたり

例會 二月二十一日午後六時より學生集會場にて開催出

席者三浦教授、江馬、富森、下川、鈴木、桑原の諸學士及び源、江藤、中村、井川、岩橋の諸君にして左記の講演あり十時散會せり

一 歴史上に於ける柔道と相撲との關係

文學士 下 川 潮君

近世専ら遊觀的興行的なされる相撲は鎌倉、足利の時代に於ては特に武藝として武士の間に重んぜられ、戰場に於ては多く相撲組打の行はれし事源平盛衰記等に見ゆる所にして其目的性質近世の柔道と殆ど同一なる事を知るべし故に柔道の相撲より脱化せる事は直信流柔道の開祖寺田滿英の登假集、山鹿素行の武家事記等にも既に此事

を論ぜり柔道の相撲より分れしは戰國末期より徳川の初期にして天文元年竹内流柔道の祖竹内久盛の捕手腰廻の名稱を創めしを轉期として福野七郎右衛門の元和の頃柔之理を發明し茨木專齊が起倒流亂を發明して斯道の基礎を造り關口柔心寺田滿英によりて大成せられたる也以て柔道は相撲を母體として生れ出し事を知るべし云々
一片桐且元の人物に就きて

文學博士 三 浦 周 行君

先づ且元の史上の疑問人物なる所以を説き從來の忠奸論を紹介せられたる後且元と豊臣家及び家康との關係を述べて且元が豊臣家の宿將にして而かも諸門の警衛に當り一萬八千石の加増を受けし事の家康の好意によりしこと彼が計數に長じ打算的人物なりし爲め夙に家康に心を寄せたるものにして從來傳へらる、以上に家康の爲めに盡瘁せることを大橋文書等に據りて證明せられ同僚の誣誣家康の籠絡に依れるものにあらずと斷ぜらる。

● 地理學研究會

和泉砂川踏査 去一月三十日午前九時七條驛に集まる

者小川教授を初め下田、淺若、藤田三學士、圓越理學部囑託、學生小牧君等合せて八名、多年の疑問たる南海沿

線「砂川の奇勝」を踏査せんが爲めなり目的地に到達したるは午後一時過頃、場所は大阪泉南郡信達村にて南海線樽井驛の東方一里にあり地は和泉山脈北麓の低き臺地にて淺き谿谷に切開せらるる地質は下部洪積層の砂岩にて全

部和泉山脈の北側に噴出せる花崗岩の崩壞堆積せるものなり「砂川奇勝」を稱せらるる、部分は此臺地の一部にて特に崩壞し易き砂岩層より或る部分が水の侵蝕作用を受けて盆地狀の窪地となり其窪地中に侵蝕を免れたる砂岩が美事なる數個の土柱として残り其間には水なきが Gully 深谷を穿ち末は所謂「砂川」として白砂を吐き出し窪地の臺地に接するところは絶壁屹立の狀を呈せり。畢竟堅に割れ易き砂岩が崩壞して生ぜる特殊の風景にて從來本邦にて土柱として知られしものは越前の吉崎臺灣の基隆近傍位のものなれば今回の踏査は所謂奇勝の真相を看破したるのみならず地理學界に一發見をなしたるものと云ふべし當日は屢々吹雪に苦しめられしも三箇のカメラに一部撮影して午後四時頃引き揚げたり

會報

評議員會 二月二日午後三時より評議員會を開き編纂及庶務會計擔任を選任せり

● 寄贈交換圖書

滿鮮地理歴史研究報告 第六・七册	東京帝國大學
史學雜誌 卅一の一二・卅二の一二	
歴史地理 卅六の六・卅七の一二	
東洋學報 十一の一	
考古學雜誌 十一の四・五・六	
國學院雜誌 廿六の一二・廿七の一二	
東洋哲學 廿七の一二・廿八の一二	
經濟論叢 十二の一・二・三	
六條學報 二二九・三三〇	
佛教研究 二の一	
佛教學雜誌 二の二・三	
佛教大學通信講義 一・三	
伊豫史談 二二・三三・三四	